

令和3年度厚生労働科学研究費補助金
(障害者政策総合研究事業(身体・知的等障害分野))

研究課題名(課題番号):強度行動障害者支援に関する効果的な情報収集と関係者による情報共有、
支援効果の評価方法の開発のための研究(20GC1005)
分担研究報告書

分担研究課題名:ICFおよびICTを活用したPDCAサイクル支援パッケージの効果検証のための社会実装研究—強度行動障害者を支援する事業所における試行調査および実践検討・意見交換会の実施(二次調査)—

主任研究者:日詰正文(国立重度知的障害者総合施設のぞみの園)
分担研究者:安達潤(北海道大学)
井上雅彦(鳥取大学)
研究協力者:岡田裕樹(国立重度知的障害者総合施設のぞみの園)
内山聡至(国立重度知的障害者総合施設のぞみの園)
高橋理恵(国立重度知的障害者総合施設のぞみの園)

研究要旨

本研究は、令和2(2020)年度に開発したICF(国際機能分類)、ICT(情報通信技術)を活用した強度行動障害PDCA支援パッケージ(以下、PDCA支援パッケージ)について、令和3(2021)年5~7月に実施した支援現場での試行調査(一次調査)の結果を踏まえ、さらなる効果や課題を把握するための調査を行った。具体的には、PDCA支援パッケージの試行と、効果や課題等を広く収集するための「実践検討・意見交換会」を実施し、PDCA支援パッケージの実用化に向けた資料とすることを目的とした。

結果として、全国から52名の応募があり、そのうち29名が試行調査に参加した。試行調査後のアンケート調査結果より、「ICFは対象者の障害特性や環境要因の把握に効果的であり、情報の整理がしやすくなった」、「ICTは記録と分析に効果的であり、記録にかかる負担の軽減に効果的であった」、「ICF、ICTを活用することで情報が視覚化され、支援者間の共有がしやすくなった」、「PDCA支援パッケージによるPDCAサイクルを行うことで、支援計画や支援手順書の作成と見直しにつながった」等の効果があり、PDCA支援パッケージが強度行動障害の状態にある者への支援において有効であることが確認できた。

A. 研究目的

1. 背景

本研究において、令和3(2021)年4月~7月に強度行動障害PDCA支援パッケージ(以下、PDCA支援パッケージ)の効果の検証を目的とした試行調査を一次調査として行った。調査は本研究の研究協力者の所属する事業所および推薦のあった事業所から選定した14カ所を対象とし、調査内容は①PDCA支援パッケージの試行と、②PDCA支援パッケージについての評価点と効果や課題等の意見収集を行うためのアンケート調査であった。その結果、「目に見

えにくい障害特性や強み、環境要因等

の包括的な情報収集」や「収集した記録の分析と関係者間での情報共有」などについて改善が期待できるツールとして、PDCA支援パッケージが有用であることが確認できた。

一方で、試行調査の対象が限定的であり、またPDCA支援パッケージに関する課題も明らかになったことから、さらなる社会的な実装研究が求められた。

2. 目的

そこでPDCA支援パッケージを作成するため

の二次調査として、PDCA 支援パッケージの試行と効果や課題の収集を行うための「実践検討・意見交換会（以下、意見交換会）」を実施し、PDCA 支援パッケージの実用化に向けた資料とすることを目的とした。

B. 研究方法

本研究は、以下の方法により行った。

1. 意見交換会の実施

■開催方法：オンライン

■開催日：全3回とした

- ・第1回 令和3（2021）年10月29日
- ・第2回 令和3（2021）年11月29日
- ・第3回 令和4（2022）年1月13日

■募集人数：32名

■参加要件：以下の要件を提示の上、募集した。

- ・国立のぞみの園が開催する強度行動障害支援者養成研修（実践研修（指導者研修））修了者または修了者の推薦を受けた者
- ・全3回連続して出席できる者
- ・自閉症を中心とする強度行動障害がある方の直接支援を行っており、事業所長の推薦を受けた者
- ・スマートフォン、タブレットのアプリを用いた記録が可能なる者

2. 試行調査

■調査対象：意見交換会に参加した強度行動障害者支援に取り組んでいる事業所29カ所とした。

■調査内容：

（1）PDCA 支援パッケージの試行

対象利用者を選定し、PDCA 支援パッケージに沿って、情報の整理、行動の記録、支援手順書の作成と見直しを繰り返し行った。

本調査では、ICFのツールとして、「ICF 情報把握・共有システム」、ICTのツールとして、「Observations」（スマートフォンのアプリ）を使用した。

（2）試行後のアンケート調査

試行調査を行った事業所の支援者を対象に、PDCA 支援パッケージについての評価点（5件法）と、効果や課題等の意見収集を行うためのアンケート調査を行った。

表1 アンケート調査の内容

Q1. 利用者の障害特性や強み、環境要因等の把握・整理が行いやすくなったかどうかについて教えてください
Q2. 支援課題が焦点化され、支援計画が具体的になったかどうかについて教えてください
Q3. 支援者が支援に必要な利用者情報や記録の収集が行いやすくなったかどうかについて教えてください
Q4. 関係者間での利用者情報や支援に関する情報共有が行いやすくなったかどうかについて教えてください
Q5. 記録に係る負担感の軽減が図れたかどうかについて教えてください
Q6. 支援に必要な利用者情報および記録等の分析がしやすくなったかどうかについて教えてください
Q7. 試行調査で実施した本パッケージ全体に関する評価について教えてください
Q8. 本パッケージの改善点等があれば教えてください (例：実施手順、使用ツール等)

調査内容は、一次調査と同じ内容とした（表1）。

■調査期間：令和3（2021）年10月29日から1月31日

（倫理面への配慮）

調査の手続きについては、国立のぞみの園調査研究倫理審査委員会で承認を得た。

■一次調査を受けたPDCA支援パッケージに関する変更点

一次調査の結果より、課題点として下記があげられた。

【PDCA 支援パッケージの進め方】

- ・ICFシステムの記入完了期限および、冰山モデルシート作成後から支援手順書の作成までの期間がかなりタイトで、調査期間内に終わるために、支援会議等の時間をしっかりとって考えることができなかった

【PDCA 支援パッケージの内容】

- ・ICFシステムの内容が難しく理解するのに時間がかかる上、情報入力に労力が必要
- ・事業所によりICTの環境整備が不十分なことや操作が不慣れなこと
- ・行動の背景要因を捉える上では支援者のスキルが必要

上記の課題を踏まえ、二次調査となる本調査では、以下の点を改善した。

- ・試行期間を約1ヶ月延ばし、約3ヶ月とした
- ・ICFシステムの入力やICTの操作等の質問に速やかに対応するため、参加者との円滑な情

- 報共有を図った。具体的には、ビジネスチャットサービスの「chatwork」を活用した
- ・各回でグループごとの進捗確認に加え、各回の間にも進捗確認の機会を細かく設定した
 - ・第2回にICF試行途中での質疑応答等のフォローアップの時間を設定した
 - ・PDCA支援パッケージのプロセスに、「支援会議の実施」を明示した（対象者の特性や行動記録の共有、冰山モデルへの落とし込みを踏まえた背景要因を把握する作業をチームで

表2 支援パッケージ試行の流れ

<p>① ICFシステムへ記入し全体像の把握</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ICF情報把握・共有システム（以下、ICFシステム）の「情報把握シート」に対象となる利用者の情報を記入する。 ・「情報把握シート分析アプリ」を使い内容を整理する。 <p>② 利用者の担当者が行動記録表を記入し、課題となる行動を選定</p> <ul style="list-style-type: none"> ・アプリ「Observations Sheet」を使用し、対象となる利用者の行動を記録する。 <p>③ 記録の確認</p> <ul style="list-style-type: none"> ・アプリの記録をPCに送る。 ・Observations分析用ホームページにデータをアップロードし、データを確認する。 <p>④ 利用者の担当者が課題となる行動のベースラインを記録</p> <ul style="list-style-type: none"> ・アプリ「Observations2」を使用し、対象となる利用者の行動の頻度や時間帯を記録する。 ・行動の記録を積み重ねる。 <p>⑤ 記録の確認</p> <ul style="list-style-type: none"> ・アプリの記録をPCに送る。 ・Observations分析用ホームページにデータをアップロードし、データを確認する。 <p>⑥ 支援会議を実施し、冰山モデルシートで行動の背景を整理する</p> <ul style="list-style-type: none"> ・冰山モデルシートを使用し、課題となっている行動の背景要因を分析する。 <p>⑦ 支援手順書の作成</p> <ul style="list-style-type: none"> ・①～⑥の内容を踏まえて支援手順書を作成する。 <p>⑧ 支援の実施および行動の記録</p> <ul style="list-style-type: none"> ・アプリ「Observations2」を使用し、⑦で作成した支援手順書を基に支援を行い、対象となる利用者の行動の頻度や時間帯を記録する。 <p>⑨ 記録の確認</p> <ul style="list-style-type: none"> ・アプリの記録をPCに送る。 ・Observations分析用ホームページにデータをアップロードし、データを確認する。 <p>⑩ ICFシステムへ記入し、支援前後の全体像の把握</p> <ul style="list-style-type: none"> ・記録の分析を踏まえて、①で記入したICFシステムを見直し、支援前後の全体像を比較する。必要に応じて加筆修正を行う。 <p>⑪ 支援手順書の修正</p> <ul style="list-style-type: none"> ・支援手順書の内容を見直し、必要に応じて修正する。

行うため)

以上を踏まえて、PDCA支援パッケージは、表2のプロセスをPDCAサイクルで行うものとした。

C. 研究結果

意見交換会の概要および試行調査の結果は以下の通りである。

1. 意見交換会について

(1) 応募人数：52名（30都道府県より応募あり）

(2) 参加人数：32名（オブザーバー参加13名）

- ・参加者の選定にあたっては、各都道府県から1名以上の参加とし、重複した都道府県については事業所種別に偏りがでないようにした

- ・選定されなかった者については、オブザーバー参加とした

- ・参加決定から第1回目までに3名キャンセルがあり、第1回目は29名で実施した

- ・第2回目から3名欠席があり、第2回目以降は26名で実施した

(3) 参加者の属性

①階級：管理職級が12名、主任支援員級が8名、支援員級が9名であった（表3）。

表3 参加者の階級 (n=29)

職級	人数(人)	構成比(%)
管理職級 (サビ管、児発管等)	12	41%
主任支援員級	8	28%
支援員級	9	31%

②強度行動障害者支援の経験年数：「10年以上」が16名、「1～3年」が5名、「7～9年」「4～6年」が各4名であった（表4）。

表4 参加者の強度行動障害者支援経験年数 (n=29)

経験年数	人数(人)	構成比(%)
10年以上	16	55%
7～9年	4	14%
4～6年	4	14%
1～3年	5	17%

③所属する事業所の種別：「施設入所支援」が12名、「生活介護」が9名、「行動援護」「放課後等デイサービス」が各3名、「共同生活援助」が2名であった。（表5）

表5 参加者の所属する事業所の種別 (n=29)

サービス種別	人数(人)	構成比(%)
行動援護	3	10%
相談支援	0	0%
生活介護	9	31%
施設入所	12	41%
共同生活援助	2	7%
放課後等デイサービス	3	10%

2. 調査結果

調査対象となった意見交換会の最終的な参加者26名のうち、25名から回答を得た。

質問ごとの回答は以下の通りである。

Q1. 利用者の障害特性や強み、環境要因等の把握・整理が行いやすくなったかどうかについて教えてください

評価点(図1)

- ・「効果的であった」と「少し効果的であった」の回答は23名で、全体の92.0%であった

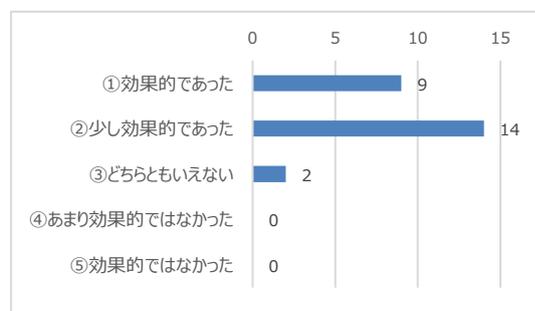


図1 回答結果(Q1評価点) (n=25)

効果

- ・特性や強み、環境要因に関する多くの項目が網羅されていたため、漏れなく情報を整理し把握することができた
 - ・利用者の強みや苦手な部分を分析するのに今までなかった視点で考えることができた
- 課題
- ・ICFシステムで問われる内容の理解が難しいため、簡略化されたものがあるとよい(表6)

表6 回答結果(Q1記述)

効果的であった・少し効果的であった
・特性や強み、環境要因に関する多くの項目が網羅されていたため、漏れなく情報を整理し把握することができた。
・今まで使用していたアセスメントよりも、気づかなかった部分を取り出すことができた。
・今までは、事業ごとに作成したアセスメントシートを使用していたが、利用者の全体像を把握したものになっていなかった。ICFシステムでは、入力した情報が本人の強みや支援の維持・調整、支援の修正、支援の考案といった項目に整理されて示されるので、全体像が把握しやすくなった。
・ICFシステムを作成することによって、強みや特性などが自動で分類されるため、効率的に整理されておりよかった。
・ICFシステム作成に関して求められるスキルやハードルの高さなど課題はあるが、シート自体は非常に有益なものと感じた。
・その利用者を知らない支援者も支援方法のイメージがつけやすくなると感じた。
・利用者の強みや苦手な部分を分析するのに今までなかった視点で考えることができた。
・記録を取りグラフ化することによってパート職員など知識をともなっていないスタッフに対して説明する時に大いに役に立った。
・問われている内容の理解が難しくアセスメントに反映できない支援員もいた。選択肢を設ける等、回答しやすい表現が多ければいいと感じた。
・ICFシステムは、だれでも見てわかるというくらいの簡略化されたものがあるとよいと感じた。
どちらともいえない
・ICFシステムは、入所施設というかなり限定された環境で生活している重度の知的障害のある利用者については効果が限定的だと感じた。
・新人や2、3年及び項目の理解が難しいと感じた経験が長い支援員もいた。しかし、この項目に解答できる力を1年プランで計画し、支援課全体で取り組めば、ICFの理解も深まり、利用者の強み等専門的な視野が広がるのではないかと考えている。

Q2. 支援課題が焦点化され、支援計画が具体的に became かどうかについて教えてください

評価点(図2)

- ・「効果的であった」と「少し効果的であった」の回答は17名で、全体の68.0%であった

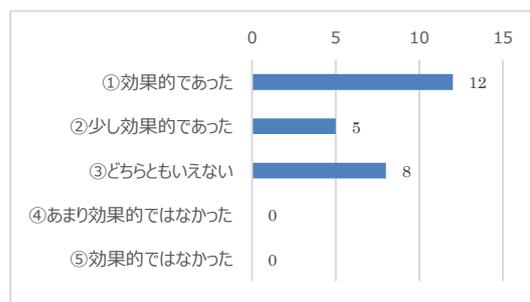


図2 回答結果(Q2評価点) (n=25)

効果

- ・ ICF システムを参考に冰山モデルシートで支援課題を整理し視覚化したことで、支援計画や支援手順書のどこを変えるべきか見えるようになった
- ・ 課題や状況が一目でわかるため、支援計画に反映する際にも効率的であった

課題

- ・ 焦点化された課題をどのように支援に結びつけていくかについてサポートが必要である（表7）

表7 回答結果（Q2 記述）

効果的であった・少し効果的であった
<ul style="list-style-type: none"> ・ 支援効果の大小が分類分けされるため、介入が必要なポイントや支援内容の見直しでクリアできる課題行動などわかりやすくてよかった。状況が一目でわかるため、支援計画に反映する際にも効率的であった。 ・ ICF システムを参考に冰山モデルシートで支援課題を整理し視覚化したことで、支援計画や支援手順書のどこを変えるべきか見えるようになった。 ・ 支援を実施していない部分は、焦点があたっていない（わかっていない）部分でもあったので、それが焦点化されてよかった。 ・ 焦点化された課題をどのように支援に結びつけていくかについてサポートが必要だと感じた。 ・ サービス管理責任者だけではなく直接支援する支援員には新しい視点があることが伝わったと感じた。 ・ 冰山モデルシートを作成したことで、障害特性、環境要因どちらに偏ることなく自然と目を向けることができた。職員の感覚に頼った支援をしていたことを反省した。
どちらともいえない
<ul style="list-style-type: none"> ・ 支援手順書の作成や課題行動に対しての支援が明確になったが、個別支援に影響したかまでは定かではない。 ・ 個別支援計画に直接反映されることはなかったが、日ごろの生活で気になる行動に対してアプローチすることができた。 ・ ICF への理解が深まらずそこから具体的な支援につなげることは難しかった。 ・ 支援課題が焦点化されたが、支援計画まで落とし込めなかった。

Q3. 支援者が支援に必要な利用者情報や記録の収集が行いやすくなったかどうかについて教えてください

評価点（図3）

- ・ 「効果的であった」と「少し効果的であった」の回答は19名で、全体の76.0%であった

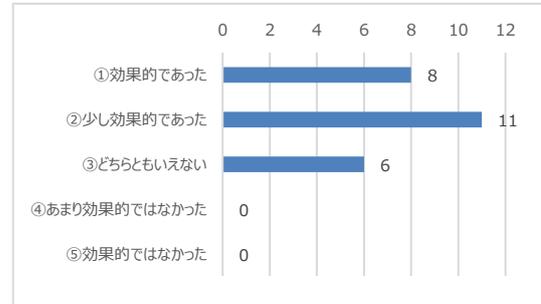


図3 回答結果（Q3 評価点）（n=25）

効果

- ・ 利用者に関する必要な情報を集めるという点で非常に効果的であった
- ・ 視覚化のしやすさや現場で記録を取れる点で効果的であった

表8 回答結果（Q3 記述）

効果的であった・少し効果的であった
<ul style="list-style-type: none"> ・ 一人の利用者に関する必要な情報を集めるという点では非常に効果的であった。 ・ ICF システムは、「活動と参加」に関しては実際の支援現場での様子を具体的に入力することで、支援員の経験年数には関係なく情報の収集ができた。「環境要因」に関しては、家族からの情報も必要なので時間がかかった。 ・ 様々な課題となる行動があるなかで特にターゲットとなる行動を決め、それに絞って時間帯や頻度の記録を付けることにより得られるデータは、その行動に対する支援を考えるにあたって重要な情報となるうえ、記録をつける負担も少なかった。 ・ 行動記録を取るという視点では非常に効果があった。視覚化のしやすさ、現場で記録が取れるので抜群に良かった。 ・ 課題がピックアップされたため、どういった記録が必要か収集する目的ができたため周知がしやすかった。 ・ 複数の機器から入力できるともっと記録の精度が上がるのではないかと。 ・ 数名の利用者には家族や周辺の方に情報を聞く機会が増えた。スタッフ数名にその意識が芽生えた。 ・ 今回記録をとるためのアプリはiPadで行ったため、一度紙ベースで記録をとってからアプリに打ち込んだ。電子機器の関係で携帯してその都度打ち込むことができなかつたため、少し手間であると感じた。 ・ 端末を使用することで手軽に入力することができ、記録の精度が上がったのではないと思う。 ・ ICT を活用することで、記録の収集やまとめる時間は短縮された。ICT を導入した記録入力が定着化すれば、業務効率は上がると思う。
どちらともいえない
<ul style="list-style-type: none"> ・ 記録の仕方に関しては、慣れやデジタル入力での得意不得意もあるので一概には言えない。 ・ 行動の記録は行いやすかつたが、その行動が起きるきっかけとしてのできごとや理由を記載できればよかった。 ・ 記録の収集に関しては取りやすいと感じたが、その記録から何か支援策、具体策へのヒントがでてくるとよいと感じた。

- ・ ICT を活用することで手軽に入力ができ、記録の精度が上がった

課題

- ・ ICT を使用した記録に対して、支援者によって慣れや得意不得意がある（表 8）

Q4. 関係者間での利用者情報や支援に関する情報共有が行いやすくなったかどうかについて教えてください

評価点（図 4）

- ・ 「効果的であった」と「少し効果的であった」の回答は 13 名で、全体の 52.0%であった

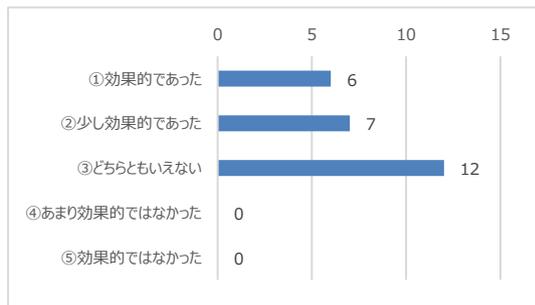


図 4 回答結果（Q4 評価点） (n=25)

効果

- ・ 利用者の状況がデータ化されることで保護者や医師、栄養士など他職種との情報共有が行いやすくなった
- ・ ICT ツールを使うことで記録の取り方が標準化され、記録の分析結果がグラフによって視覚化されるので理解しやすかった

課題

- ・ 調査期間で他機関と情報共有する機会がなかった（表 9）

表 9 回答結果（Q4 記述）

効果的であった・少し効果的であった
・ データ化されることによって行動が起きるタイミングやどの期間に集中しているか等を医師や保護者との情報共有が行いやすくなった。
・ ICF システムのように基準となる書式があると利用者情報が整理できる。
・ ICT ツールを使うことで、記録の取り方が標準化され、記録の分析結果がグラフによって視覚化されるので理解しやすかった。
・ 今回は生活介護事業所と行動援護事業所の 2 か所のみで協働したが、事業所数が増えた場合、ICF システムの作成や支援者会議の持ち方もさらに時間と会議の持ち方に技術が必要になると思う。
・ 記録等は保管場所を決め、いつでも確認できるようにした。また、定期的に話し合いを持ち情報共有、また支援方法の見直しを行なった。
・ 今回の試行では他職種との連携はなかったが、ターゲットとする行動の内容によっては、医師、看護師や栄養士等と連携の必要がある場合も考えられ、その際には情報共有しやすくなるものと思われる。
どちらともいえない
・ 当事業所内の支援員間での情報収集に留まっていた。教育や医療、他事業所、保護者との情報共有への活用までは至っていない。
・ ICF システムが共通のツールとして活用できれば、情報共有がスムーズにできるのではないかと期待できる。
・ 今回の取り組みの中ではその他の関係者（看護師、医師、管理者）とは連携しておらず効果は不明。

Q5. 記録に係る負担感の軽減が図れたかどうかについて教えてください

評価点（図 5）

- ・ 「効果的であった」と「少し効果的であった」の回答は 12 名で、全体の 48.0%であった

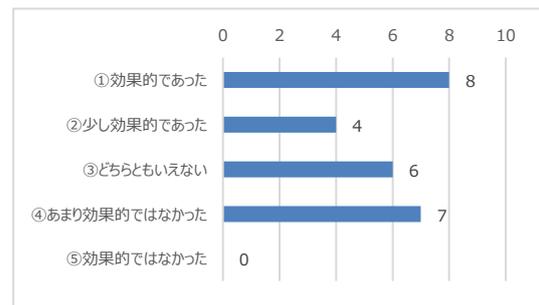


図 5 回答結果（Q5 評価点） (n=25)

効果

- ・ ICT を活用することで記録にかかる負担感の軽減に一定の効果はあった

課題

- ・ ICF システムの記録は項目数の多さや内容の難しさがああり、通常業務に加えて取り組む場

合は負担感がある

- ICT ツール (Observations) の記録を手軽にネット上で共有できればよい (表 10)

表 10 回答結果 (Q5 記述)

効果的であった・少し効果的であった
<ul style="list-style-type: none">記録に係る負担感の軽減に一定の効果はあったと思われる。日常の行動記録をこの行動記録システムのみに変更することはできないため、日常の行動記録の負担が軽減するかどうかという意味では軽減はしない。ただし、応用行動分析を実施する際に、スキッタープロットを紙で記録してそこからエクセルに落とし、グラフ化することと対比すると、タップするだけで記録でき、グラフ化・分析もすぐに行えることは大いに負担の軽減につながると思う。端末の操作に慣れてしまえば記録をとる労力はかなり低くなった。これまでスキッタープロットを紙でとっていたので、タブレットで入力でき、さらに分析できたのはとても効率的であった。observations 等の利用はタブレットを使用し、タップで回数をカウントしていく簡単なやり方だったため記録の手間が軽減でき好評であった。現在、ペーパーで記録をとっているが、observations 2 は特に支援員からの評価が良かった。すべてのソフトなどが連携できるようなシステムがあると、より負担軽減が図れると感じた。端末で記録をとることはとても有効と感じた。年齢層にも依ってしまうかもしれないが、今後も使用したい。
どちらともいえない
<ul style="list-style-type: none">タブレットでの記録については軽減になると感じるが、電子機器が苦手な職員にとっては負担感が増しているように感じた。
あまり効果的ではなかった・効果的ではなかった
<ul style="list-style-type: none">ICF システムの記録については項目数が多いこと、問われている内容の表現に難しさがあることなどにより負担感としては大きく感じた。今回は、法人内の通常業務に加えての記録でもあることも大きかった。アプリケーションを導入した端末でしか記録が反映されないため、インターネットを媒介にしてネット上で共有できるなど改善があれば軽減につながると思った。既存のデータがあるうえで、今回のデータで業務量は多くなったと感じた。しかし共有できるシートという強みはとても感じた。一旦できてしまえばあとは見直しをすればよいだけなので、既存のシートをこちらにスライドしていくことも可能と考える。成人の施設だが、児童からの引継ぎの際に ICF システムを活用できるととてもよいと感じた。

Q6. 支援に必要な利用者情報および記録等の分析がしやすくなったかどうかについて教えてください

評価点 (図 6)

- 「効果的であった」と「少し効果的であった」

の回答は 18 名で、全体の 72.0%であった

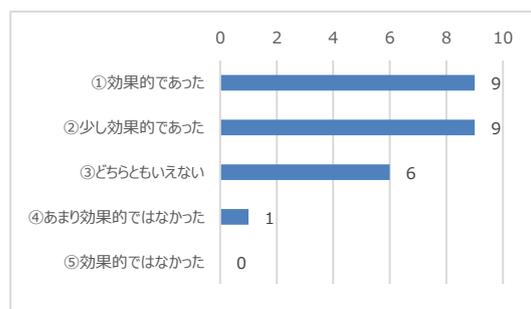


図 6 回答結果 (Q6 評価点) (n=25)

効果

- 入力した記録が自動的にグラフ化されることで、利便性が高く分析もしやすくなった
- ICF システムは強みや支援の継続、修正などに分析できるため、どの部分にスポットをあてて考えればよいか分かりやすかった

課題

- 行動の生起率などはわかりやすくなるが、行

表 11 回答結果 (Q6 記述)

効果的であった・少し効果的であった
<ul style="list-style-type: none">グラフになるので見てもらいやすく時間帯などしっかり分析できた。細かい時間の指定や他の項目も一緒にグラフ化できるとよい。自動的にグラフ化されることで、客観的に行動を分析することができた。紙で書くと字のきれいさや丁寧さなど個々にバラつきがあるが、アプリを使用することで一律で見やすかった。タグ選択や自動での集計など、利便性が高く分析もしやすかった。項目ごとに分かれていたため、必要なものを選びやすかった。そのため、分析もしやすく、支援会議の場でもすぐに確認することができた。分析自体は、ファイルを読み込むだけなので簡易的になった。しかし、知りたい情報が得られない場合も多い。行動をデータ化することが容易にはなったが、共有には課題を感じる。端末データの共有ができると分析までの負担も軽減されるのではないかと感じた。ICF システムでは、強みや支援の継続、修正などに分析できるため、どの部分にスポットをあてて考えればよいか分かりやすかった。
どちらともいえない
<ul style="list-style-type: none">強度行動障害の支援経験が長いスタッフは気づきを得ていたが、新任スタッフには難しいようだった。Observations の解析にのせたところで、折れ線グラフが混ざってしまいわかりづらい点があった。分析はデータの変換が手間だった。グラフも見やすさをあまり感じなかった。
あまり効果的ではなかった・効果的ではなかった
<ul style="list-style-type: none">行動の生起率は見えてわかりやすいが、行動に対する前後の様子がわからない。

動に対する前後の様子がわからない (表 11)

Q7. 試行調査で実施した本パッケージ全体に関する評価について教えてください

評価点 (図 7)

- 「効果的であった」と「少し効果的であった」の回答は 19 名で、全体の 76.0%であった

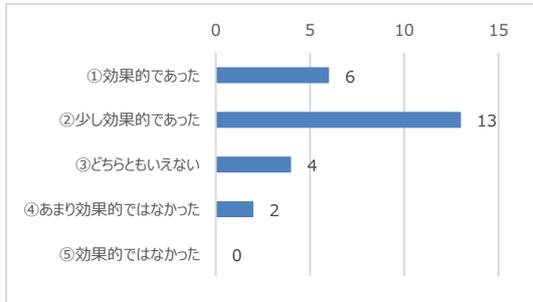


図 7 回答結果 (Q7 評価点) (n=25)

効果

- ICF システムは、障害特性や環境要因の把握に効果的であった
- ICT ツールは、記録と分析に効果的であった
- 利用者のおかれている環境や生活の質を考える、という ICF の視点に沿うことで支援の改善が望める
- パッケージを事業所内で標準化できれば情報の更新や共有、支援会議など様々な点で活用できる

課題

- 3ヶ月間の試行では不十分であった
- このパッケージを全国的に広める場合は、使いやすい手軽さがなければ普及にはつながらない (表 12)

Q8. 本パッケージの改善点等があれば教えてください (例: 実施手順、使用ツール等)

ICF について

- ICF からどのように支援手順書につなげていくかについて享受する時間 (講義や研修) が必要ではないか
- ICF シートは、項目数が多く、文字が小さくなり見にくさがあり、特に年配の支援員になると見る気がなくなってしまう
- 効果の判断基準で支援員間の差が出やすいと感じたため、目安となる基準があるとよい
- パッケージの実施手順で、ICF シートを支援会議でどう活用すればよいかがあると進めや

表 12 回答結果 (Q7 記述)

効果的であった・少し効果的であった
<ul style="list-style-type: none"> ICF システムは、障害特性や環境要因の把握に効果的であった。ICT ツールは、記録と分析に効果的であった。 細かいところでは改善して欲しい点もあったが、総合的に ICF や ICT は活用すべきだと感じた。ペーパーレス、コロナ、リモート等、時代の変革が来ているなか、働き手のモチベーション維持や業務の簡素化が絶対的に必要だと感じる。 ICT を活用した記録は大変使用しやすく支援員からも評価が良かった。 今回試行してみて支援員のスキルやモチベーションの差が大きく、このパッケージをどう入れ込むかが大きな課題だと感じた。 ICF システムは、より簡素化されるようになれば活用できると思う。また、重度の方をターゲットしても強みが現れるような分析結果になると支援も導きやすいが、強みがない=重度となると支援につなぎにくいのではないかと感じた。 事業所内でも肯定的な意見が多く、具体的なパッケージに関する否定的な意見はなかった。 ICF の観点をとらえるためのスキルも必要であると感じたため、ICF システムの記入に関する研修を実施していくことで、支援者も取り組みやすくなるのではないかと感じた。使いやすさや観点が身につくと、より効果的に活用できるのではないかと感じる。 行動の役割を分析→改善という行動学的な改善のみではなく、利用者のおかれている環境、今の生活の質を考える、という ICF の視点から考えるという点がとても素晴らしいと感じている。形がきまっておき、それに沿って進めていけば支援改善が望める、というのはとても画期的だと感じる。 他施設での実践報告や、有効性のデータなどが活用できれば法人や現場に対して導入に向けて働きやすくなると感じた。
どちらともいえない
<ul style="list-style-type: none"> 3 か月での短期間の施行だったので急ぎ足な感じになってしまった。 パッケージを事業所内で標準化できれば情報の更新や共有、支援会議など様々な点で活用できることはイメージができる。今回はほぼ一人で試行錯誤していたので、施設全体の理解と協力が必要になることがよく理解できた。
あまり効果的ではなかった・効果的ではなかった
<ul style="list-style-type: none"> この期間での大きな効果は見られなかったが、ヒントや気づきは多かった。 このパッケージを全国的に広めるとなると、みんなが好んで使いたがるような手軽さがないと、普及、支援の広まり、深まりにはつながらないと感じた。

すかった

ICT (Observations) について

- Observations を同一のアプリ内で分析結果

が見られるとよい

- ・回答分析やデータを Observations のスマホアプリから一度 PC に送るなどが手間なため、手順や操作がもう少し簡素化されるとよい
- ・事業所のタブレットでは Observations の分析ができなかった
- ・Observations のデータは、HP で読み込んで分析するのではなくそのまま分析結果が出せるとよい
- ・Observations 2 の分析結果について、縦軸、横軸がもう少し細かく表示されるとよい
- ・Observations2 のデータは、日付を指定して分析できるとよい

パッケージについて

- ・活用する現場が ICT に慣れていない状態像を想定してのツールやアプリの使用が必要ではないか
- ・機器の使用法のレクチャーについてもパッケージ内に含めてはどうか
- ・PDCA 支援パッケージの紹介文をもう少しわかりやすくしたほうがよい（図も交える等）。せっかく良いパッケージなのに、研修紹介のチラシの文章からはどういうことをするのか理解するのが難しかった
- ・ICF の視点をどう支援改善につなげていくのか、事例の提示があればイメージがしやすかった

D. 考察

試行調査の結果、PDCA 支援パッケージの評価として、評価点では、「パッケージの全体評価 (Q7)」は、「効果的であった」と「少し効果的であった」の回答の割合が全体の 76.0% であり、また、「利用者の全体像の把握 (Q1)」が 92.0%、「情報の収集 (Q3)」が 76.0%、「記録の分析 (Q6)」が 72.0%であった。

具体的には、

- ・ICF は対象者の障害特性や環境要因の把握に効果的であり、情報の整理がしやすくなった
- ・ICT は記録と分析に効果的であり、記録にかかる負担の軽減に効果的であった
- ・ICF、ICT を活用することで情報が視覚化され、

支援者間の共有がしやすくなった

- ・PDCA 支援パッケージによる PDCA サイクルを行うことで、支援計画や支援手順書の作成と見直しにつながった等の効果があった。

これらの結果より、強度行動障害の状態にある者への支援において PDCA 支援パッケージの活用が効果的であることが確認できた。

一方、評価点において、「情報共有 (Q4)」と「記録の負担 (Q5)」の「効果的であった」と「少し効果的であった」の回答の割合が全体の 52.0%、48.0%と他の項目に比べて低かった。理由として、「今回の調査期間で他機関と情報共有する機会がなかった」、「ICF システムの記録は項目数の多さや内容の難しさがあつた」、「アプリで即時的に記録できない状況があり転記が必要であつた」、「Observations の記録を手軽に共有できるとよい」といった回答があつた。今後の課題として、強度行動障害支援における ICF システムの記入内容の検討、事業所における ICT 活用環境の整備、パッケージを活用した他機関との共有事例の試行の必要性等が考えられた。

また、「ほぼ一人で試行しており、施設全体の理解と協力が必要」、「職場内での ICT の環境整備が必要」、「ICT の理解や取り扱いで支援者間の格差が生じる」、「PDCA 支援パッケージのレクチャーのための説明や研修等があればよい」といった回答があつた。パッケージを支援現場で活用していくためには、事業所全体の取り組み、事業所内で推進していく中心人物の存在、パッケージの導入効果を含めたわかりやすい資料の必要性等が重要であると考えられた。これら課題の解決に向けて、継続的な試行と検討が必要である。

E. 結論

本研究により、全国の支援者を対象とした意見交換会を実施し、広く意見を収集したことで、強度行動障害の状態にある者の支援において、PDCA 支援パッケージが有効であることが確認

できた。ただ、PDCA 支援パッケージに関する課題も指摘されており、今後も支援現場において有効に活用するための検証と見直しに取り組んでいきたい。

【文献】

- 1) 日詰正文、岡田裕樹、内山聡至ほか：強度行動障害者支援のための ICF、ICT を活用した PDCA サイクルの運用マニュアル案作成のための研究 令和 2 年度厚生労働科学研究費補助金報告書 (2021)。
- 2) 安達潤：ICF の視点に基づく情報把握・共有システムの研究開発—知的障害・発達障害児者支援における多領域連携の実現に向けて— 発達障害研究 40 (4) : 336-351 (2018) 。
- 3) 井上雅彦, 中谷啓太, 東野正幸：行動上の問題に対する行動記録アプリケーション “Observations” の開発 行動分析学研究, 34 (1) : 78-86 (2019) 。

G. 研究発表

なし

H. 知的財産権の出願・登録状況

なし